

# 小学校外国語授業におけるパフォーマンス課題とルーブリックの活用が 教師の学習観・指導観に及ぼす影響

稲葉 英彦  
(静岡大学教育学部)

## The Impact of Performance Tasks and Rubrics on Elementary School Teachers' Beliefs about Learning and Instruction in Foreign Language Education

Hidehiko INABA

### 要旨

本稿では、パフォーマンス評価とルーブリックを実際に授業に導入した小学校教員が、外国語教育における児童の学びをどう捉えるようになったのか、また授業における指導内容や方法に変容があったのかを明らかにすることを目的とした。佐藤ら(2024)は、ルーブリックの有無とその活用方法によって、児童のパフォーマンスを評価する視点が異なり、授業者の評価観が変容することを明らかにしている。パフォーマンス課題とルーブリックを活用した授業は、授業の捉え方や児童の学びに対する教師の理解にも影響を及ぼす可能性がある。そこで、パフォーマンス課題やルーブリックを活用した授業を実践した小学校英語専科教員2名を対象に、半構造化インタビューを実施し、その語りをもとに、学習観や指導観に関する教師の認識の変容を分析した。その結果、単元のゴールを教師が明確に意識し、児童と共有することで、児童の英語による記述や発話を肯定的に捉え、その価値を見取ろうとする姿勢が強まることが示唆された。また、児童の表現の背後にある意図や思いに着目し、それを引き出そうとする指導への意識変容が見られ、児童の心情面を尊重した授業づくりにつながる可能性が示された。

キーワード： 外国語教育、教員研修、教師教育、学習評価、パフォーマンス評価

### 1. はじめに

小学校外国語科の授業において、児童の学習状況把握及び指導改善を目的としたパフォーマンステストが多く実践されている。文部科学省(2022)によれば、全国の公立小学校を対象としたパフォーマンステストの実施率は、5年生は96.6%、6年生では97.0%に達している。外国語の授業では、スピーチやALTとのやり取りなどを課題として設定し、児童の英語による発話や記述を評価することを目的として実施されていると考えられる。一方、パフォーマンステストによる評価は、総括的評価の手段として機能するのではなく、教師の指導改善や児童の学習改善につながることを求められる。丹藤(2023)は、青森県内の小学校教員を対象に、パフォーマンステストの実施状況やルーブリックの活用状況を調査した。その結果、児童一人一人に対する個別のテストの実施率が低いことや、評価基準となるルーブリックの作成率が低いことが報告されている。このことから、パフォーマンス課題の評価において、評価基準となるルーブリックが十分に共有されないまま実施されている可能性が指摘できる。授業においても、児童や教師にとって目指すゴールの姿が明確でなかったり、教師の主観的・恣意的な評価に基づく指導となったりしていることが考えられる。

パフォーマンス課題において到達すべき姿を踏まえ、指導上重視したい点をルーブリックとして教師と児童が共有することは、学習の焦点を明確にし、児童の実態に応じた柔軟な指導改善につながる(赤沢、2022)。このように、パフォーマンス課題やルーブリックを実践の中で活用することは、授業の捉え方や児童の学びに対する教師の理解にも影響を及ぼす可能性がある。しかし、パフォーマンス課題やルーブリックの活用が、教師の学習観や指導観にどのような影響を与えるのかについては、十分に検討されていない。

### 2. 先行研究と実践の背景

外国語授業におけるパフォーマンス課題とその特徴、ルーブリック活用の意義、さらにパフォーマンス課題とルーブリック活用による教師の認識変容について、先行研究を整理する。

西岡・石井(2018)は、生きる力を身に付けるためには、現実社会にあるような課題に対して、様々な知識やスキルを統合して使いこなすことで解決することが重要であると論じている。外国語科の授業においては、指示された言語材料や付与された形式を模倣する活動ではなく、現実には生起しうるリアルかつ複雑な状況において、その発話や記述内容が問われる課題である。

本稿においては、既習事項を用いながら、特定の目的を遂行するために、知識や能力が総合的に試される状況で設定される課題を「パフォーマンス課題」として定義する。

パフォーマンス課題は、どのように設定され、どのような条件であれば、児童が必要感をもって知識や能力を総合的に活用するようなパフォーマンスを表出するのか。松村（2017）は、現実社会にありそうな課題で、特定の言語材料を明示したり指定したりすることなく、自由な会話の形式で実践できる課題であれば、総合的な知見を働かすことができると論じている。パフォーマンス課題においては、児童があらかじめ示された言語材料や形式を流暢に再現することをねらいとして、同一内容を繰り返し練習することに主眼を置いていない。その場で認識できる状況や場面に応じて、柔軟に発話や記述を表出させることがパフォーマンス課題では求められている。

小学校外国語科の授業におけるパフォーマンス課題では、児童が一定の既習事項を活用することが予想されるが、教師の想定外であったり、予測不可能なパフォーマンスが表出されたりすることもある。赤沢（2025）は、小学校教員にとってパフォーマンス評価の認知度は高く、教科書には、改定するたびに具体的な単元終末の課題が設定されるようになり、児童への指導のポイントも明示される傾向にあるという。一方、ルーブリックについては教員の理解が乏しいと指摘する。児童にとって魅力的な課題は提示するものの、教科書に示された表現や伝達内容の再現に依拠している場合もある。そのため、指導内容と評価の間に不一致が生じ、児童のリアルな発話や記述に、柔軟に対応できていないことも起こりうる。

これらを踏まえると、評価を見据えた指導内容が必要である。児童のパフォーマンスを通じて、児童が課題を解決する際の質的評価を行う基準が「ルーブリック」である（阿部、2019）。パフォーマンス課題は設定される一方で、この評価基準となるルーブリックが伴っていないために、教師の指導改善あるいは児童の学習改善につながっていないことが考えられる。佐藤ら（2024）は、小学校教員を目指す大学生を対象に、ルーブリックの活用の有無が、児童役の学生のやり取りを評価する際にどのような影響を与えるかを分析した。ルーブリックを活用しなかった学生は、文法の正確さを過度に重視する傾向にあり、かつ非言語的要因であるアイコンタクトを重要視する傾向が見られた。他方、ルーブリック活用した学生は、アイコンタクトや声の大きさ等に影響を受けず、目的や状況に応じた流暢さ、次に文法の正確さという言語的側面に着目したという。同一のパフォーマンスを評価した際に、その評価が大きく異なったことが報告された。ルーブリックの有無とその活用方法によって、児童のパフォーマンスをど

う解釈するか、つまり、授業者の評価観が変容することが明らかとなった。

このように、ルーブリックはパフォーマンス課題に包括されるコミュニケーションの目的や場面、伝える対象などを踏まえ、十分検討されるべきである。駒井（2025）は、産出領域におけるパフォーマンステストで用いられているルーブリックについて、多様な指導事例をもとに整理し分析した。その結果、作成されたルーブリックには評価項目が偏っていたり、記述文の質記述が乏しかったりと、評価基準の達成度を測っていないものがあったとした。ルーブリックの作成に伴う評価項目や内容を検討することは、児童に望むパフォーマンスの具体、児童の実情や関心に沿う課題の種類など、指導内容や評価を根底から問い直すこととなりうる。

次に、小学校外国語においてルーブリックはどう活用すべきか整理した。石塚（2024）は、Small Talkにルーブリックを活用し、継続的に児童のやり取りする力を育成した。ルーブリックを指導のポイントとして活用していることに加え、長期的に児童と共有していることが意義深いと言える。また、泉・長沼・山川・幡井（2022）は、活動のゴールが児童にわかるように、ルーブリックを児童にわかりやすい言葉で構成した上で単元冒頭に配布し、児童自身がルーブリックを生かして話すこと〔発表〕に取り組んだ。「行きたい国」について発表する過程において、児童が自信の発話を分析することで、資質・能力の向上につながったと報告している。これらの実践からは、これまで授業者が一方向的に作成・活用していたルーブリックは、児童と積極的に共有することにより、そのルーブリックが児童の手の中で、パフォーマンスの質を向上させる手がかりとなっている。ルーブリックを作成するだけでなく、授業の中で、児童と共有し、調整し、更新することで、児童のパフォーマンス向上につながっているのである。

パフォーマンス課題やルーブリックは、その作成から活用までを再考することで、授業者にとって授業改善の足場となりうる。辻（2022）によれば、一度作成したルーブリックを複数の評価者とともに検証・修正していくことで、ルーブリックの質の向上とともに活用方法についても改善されたという。加えて、ルーブリックの目的を多元的に再考することになり、授業を実践する教員の養成につながったとしている。高井・岡崎（2019）は、ルーブリックを活用した授業に挑戦した高校の英語科教員を対象に、パフォーマンス評価が教員の協働に関する調査を行った。この調査により、生徒がパフォーマンス課題に取り組む際に期待される学習観を描出し、生徒自身がどのような力を付けたいと思っているのかを教師が把握する重要性を示唆している。稲葉（2024）によれば、パフォーマンス課題とルー

ブリックを活用した研修においては、授業実践上の課題や授業改善に向けた手がかりを見いだし、志向的な教員の学びを析出したとしている。パフォーマンス課題とルーブリックの活用を授業に導入し、その改善を図りながら授業設計を実践していくことは、授業者の児童のパフォーマンスを把握する視点の転換や、授業者自身の授業観や指導観を更新することが示唆されている。

これらの研究から、パフォーマンス課題やルーブリックの導入は、評価方法の改善だけでなく、教師自身が児童の学びや表出されるパフォーマンスをどのように捉えるかという認識にも影響を及ぼす可能性がある。

そこで、本稿では、パフォーマンス評価とルーブリックについて学び、それらを実際に授業に導入した小学校教員が、外国語教育における児童の学びをどう捉えるようになったのか、授業における指導内容や方法に変容があったのかについて明らかにする。

### 3. 研究目的

本研究は、パフォーマンス課題やルーブリックを含めた単元構想づくりについて学び、実際に授業に導入した小学校教員を対象とする。その実践を通して、外国語教育における学びをどう捉えるようになったのか、授業における指導内容や方法にどう変容があったのかを明らかにし、パフォーマンス課題とルーブリックが授業者に与える影響を検討することを目的とする。

### 4. 実践の概要

小学校英語授業を担当する小学校教員が、以下のような手順でパフォーマンス課題とルーブリックの活用・作成について学び、自身の授業においてパフォーマンス課題とルーブリックを活用した授業を実践した。

本研究では、小学校教員2名を対象とし、筆者から授業づくりに関して(1)パフォーマンス課題とルーブリックの理論的背景と基本的概念を教授、(2)パフォーマンス課題とルーブリックを含む単元を構想した上で、(3)授業を実践した。(1)(2)は筆者が授業づくりに関する個別カンファレンスを行った。対象者の背景等については後述する。

(1) 対象者は、パフォーマンス課題とルーブリックに関する研究や実践報告をもとに、そのねらいや目的などについて理解を深めた。

(2) 対象者は、筆者の助言を受けながら、公開授業に向けて相談会形式で、授業を構想、指導案やルーブリックを作成した。

(3) (2)で構想した授業を実践し、その授業を振り返り、パフォーマンス課題とルーブリックを活用したことに関する効果や児童への影響を言語化した。

(1)については、パフォーマンス課題とルーブリッ

クの作成と活用について、その意義や活用方法に関する基本的な考えを説明している。赤沢(2025)、阿部ら(2019)による教科書にある活動との関連やルーブリックの理論的背景、辻(2022)や泉ら(2022)が実践上で得た示唆をもとに、パフォーマンス課題とルーブリックをどう授業で活用するか、一般的な講義と短時間による演習を行った。加えて、佐藤ら(2024)のルーブリックの有無による授業者の評価内容の変容について、具体的な事例をもとに話題とした。2名の対象者は、それぞれ別々の相談会の機会として参加したが、類似した内容であった。

(2)においては、2名の対象者が公開授業を行う予定となっていることから、作成した指導案や授業構想をもとに相談会形式で、構想した授業に基づく具体的な助言等を個別に行った。(1)で扱ったパフォーマンス課題とルーブリックの目的や、ルーブリックの活用方法について授業における児童の姿を構想しながら確認をした。ここでは、作成したルーブリックを授業の指導の軸として活用することを目指している。児童の学習状況について、ルーブリックをもとに把握し、中間評価に活用できるようにした。児童がどのような資質・能力を発揮することを願うのか、児童の実態に応じた具体的な学習状況を言語化しながら、ルーブリックの記述文を作成した。また、泉ら(2022)が論じるとおり、授業過程においては、ルーブリックを柔軟に変更、更新あるいは調整してよいものであることを確認した。

個別カンファレンスでは、パフォーマンス課題やルーブリックの活用に関して、対象者から以下のような疑問や悩み、気づきが生じた。

#### 【既習表現に関する指導】

- ・単元で学んだ言い方(I like~/He can~/.)をできれば児童に使ってほしい。
- ・言語材料の正確性(正しく言えること)は、気にしていない。児童はどうしても気にしてしまう。

#### 【ルーブリックの児童との共有】

- ・授業者が「これができるようになるといいね」と言ってしまうのは、児童のやりたいことを妨げてしまっていないか。
- ・児童とルーブリックを共有する際に、配布したり提示したりしてもよいか。

#### 【ルーブリックを用いた指導】

- ・bad(基準C)の児童がいたときに、教師がどの程度関わるとよいか悩んでいる。

#### 【ルーブリックの作成】

- ・ルーブリックに決まった形がなく、どのようなことができればよいか具体的に想起して作成が難しい。

対象者は筆者との個別カンファレンスにおいて、助言をもとにパフォーマンス課題とルーブリックを

作成した。以下は、2名の対象者（A・B）が作成したパフォーマンス課題とルーブリックの例（図1・図2）である。

- (1) Aのパフォーマンス課題・ルーブリック例：  
自分の新たな一面や、推しの良さを発表してクラスのみならずとも仲良くなるよう。

	知識・技能	思考・判断・表現
Very Good	Goodに加えて、自分の新たな一面や推しの良さを多く知ってもらうために、これまで以上に調べた良さを詳しく説明し、ほかの発表でできる。	Goodに加えて、 <b>選んでいる人にとって分かりやすい発表になるように、正しさを確認</b> 発表することができる。
Good	自分の推しについて、職業、趣味とつながりや性格を詳しく発表できる。	好きなことやできることなど、自分の推しの一面や推しの良さを <b>よく</b> 知ってもらうための内容を考えて発表することができる。
Bad	自分の推しについて発表できない。	

図1 Aが作成したルーブリック例

- (2) Bのパフォーマンス課題・ルーブリック例：  
6年生のみなさんは、もう少しで小学校を卒業します。入学してから、多くの人と関わってきました。そこで、1番感謝を伝えたい人に食べて欲しい「世界に1つしかないSuper Thank you Sandwich」を考え、サンドウィッチに込められた感謝の思いが伝わるように聞き手に伝えましょう。

	技能・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
A	誤りのない正しい英語で発表することができる。	より自分の思いや考えが伝わりやすいように意識して、伝える内容やその順序を考え、条件①と②を満たしている。	自分の思いや考えが伝わりやすいように意識するなかで、ジェスチャーを使うなど伝わりやすくなる工夫を2つ以上している。
B	誤りが1部あるが、コミュニケーションに支障のない程度の英語を用いて発表することができる。	条件①と②を満たしている。	自分の思いや考えが伝わりやすいように意識するなかで、ジェスチャーを使うなど伝わりやすくなる工夫を1つしている。
C	正しい英語で、十分に話すことができない。	条件①と②を満たしていない。	伝わりやすくなる工夫をしていない。

条件1：なぜそのサンドウィッチにしたのか、思いや考えを伝えることができる

条件2：ALTからの質問に答えることができる

図2 Bが作成したルーブリック

2名のパフォーマンス課題とルーブリックは、児童の実態に応じて作成されたものであり、対象者が実践を行う教室の児童に応じた指導が可能なものであることを意識した。加えて、目的や場面、状況等及びルーブリックの記述文を具体的にしよう心がけた。

## 5. 調査

本調査の目的は、パフォーマンス課題及びルーブリックの活用を授業づくりに生かしている対象者の学びや気づきを得ることであり、以下の2点の研究課題に基づき、データの収集及び分析を行った。

- (1) パフォーマンス課題及びルーブリックの活用は、授業づくりにどのような影響があったか。
- (2) パフォーマンス課題及びルーブリックの活用は、対象者自身の学習観・指導観にどのような影響があったか。

### 5.1. 研究の対象者

小学校にて英語専科教員を務め、研修後に指導案作成等の必要があり、授業を再考する機会があった2名を対象とした。英語専科教員を対象とした理由として、授業を公開することで、パフォーマンス課題やルーブリックの構想をもとに授業づくりについて問い直す機会となっていること、校内で一人職として相談する相手が限られ、学んだことを授業づくりに反映する意欲が高いことが挙げられる。表1に示すとおり、2名とも中堅に近く、校内や地区において今後若手を指導したり、代表者として授業を公開したりする可能性が高い教員である。

表1 研究対象者2名の経歴等

対象者	教員歴	担当校数	専科歴
A	8	2	5
B	10	3	3

## 5.2. 調査方法及び分析方法

調査方法として半構造化インタビューを実施した。本研究の中で用いられた半構造化インタビューの質問項目は以下のとおりである。

- (1) パフォーマンス課題及びルーブリックを活用する前と後で、授業に変容があったか
- (2) パフォーマンス課題及びルーブリックを設計する際に、意識していることはあるか
- (3) パフォーマンス課題及びルーブリックを授業に導入して、児童の学びはどう変容したか
- (4) 学習課題の設定やルーブリック作成の際に、課題と感ずることはあるか

実際のインタビューにおいては、上記の質問を含め、対話の流れや対象者の回答に応じて、順番を変更したり具体例を問うたりして、対象者が回答しやすいよう意識した。本インタビューは、2025年10月及び12月に実施され、筆者が直接、質問者と進行役を担当した。インタビュー内容の分析については、佐藤（2008）を基に行った。まず筆者が半構造化インタビュー内容を文字起こし、逐語録を作成した。逐語録を繰り返し精読し、大まかなテーマのあぶり出しを行った（オープンコーディング）。その後、研究課題に基づいて、再度インタビュー内容を精読し、発話の意図を熟考したうえで、コードを付与した（焦点的コーディング）。

### 5.3. 倫理的配慮

対象となる教員に対して、研究計画や概要、研究論文等への活用に関する説明を行い、インタビュー内容に関する録音、録画及び研究データを活用する許可を得て実施した。個人が特定されないよう十分な配慮を行っている。

## 6 調査結果と考察

以下、質問項目に即して、発話内容と付与したコードの例を提示する（表2）。発話内容の文尾にある（ ）内のアルファベットは発話した対象者のアルファベットと一致している。

表2 発話内容とコード名の一部

コード	発話内容
ルーブリックと主体性	(ルーブリックがあると) 自分に余裕ができるっていうか。中学年だと一時間ずつツ切れな感じで、こっちがめっちゃしゃべっちゃう。(ルーブリックが見えないと) 子どもが受け身なんですよね、基本。(B)
課題の汎用化	今はそのクラスによって変えてはいないけど、本当はクラスに応じた言語活動があるはずって思ってる。A校に通用する言語活動が、B校だと通用しないって。あるんですよ、あんまクラス間の差はないけど、学校が違うと・・・めっちゃ感じます。(B)
閉じられた評価	(研修会の前は) こっちが知っておけばいい、子どもが知らなくてもいいって。(A)
必然性	慣れもあると思うんですけど、子どもがやりたい、伝えたいって思っていないと、こっちも焦ると思うですよ。これ、やっぱダメだったかとか、子どもがめっちゃつまんなそうにしてると。(B)

### 6.1. ルーブリックの活用は、授業づくりにどのような影響があったか

コード	発話内容
ゴールの共有	ブレは少なくなったなって。最初にゴールを示したから、そこに向けて、内容や方法は変えつつだけど、そこに向けていくっていう。(A) ゴールを子どもと共有しようって話でたときにつくって。最初は思判表と知識を分けずに。これができれば good というものを大雑把につくって (A)。
指導改善の手がかり	自分の指導の改善にはある程度なってるかと。(A) どんだけ子どもの、反応とか発言を想定できるかって。子ども理解ですね。その、専科っていう立場だからこそ、子ども理解が一番大事で。週2しかないから。担任だったらどうかっていうのを試してみたい。外国語以外の授業もやって、Aくんはこういうことしてくれるんじゃないかって、もっとダイナミックにできるかも。(B) 自信は・・・自信までではないけど・・・ルーブリックがあるから一人一人の到達度に意識がいたり、それをみたうえで、次、手立てをこう打たないとだめかなとか。そういったことに生かして、改善資料としてつかっている。(A)
子どもへの問いかけ	今までは「こうじゃない?」「こういうことだよ、こうしなよ」って言っちゃってたんですけど、今は、インド人を想定しているの?とか。I like icecream. って書いたら、「自分のことを書かないで」って言ってたけど、今は「どんな言葉をかけてあげられそう?」って。(B) なんで自己紹介するの、とか、なんでサンドイッチ紹介するの?っていう、目的?に自分はフォーカスしているんで。(B)
評価への自信	子どもにこれをやればいんだって理解してほしいんですけど、正直なことを言うと、自分が評価するときにそこに頼れるんで。子どもに示したから、このあ

	らわれだったらBだなって。(A)
見通しをもつ	パフォーマンス課題を設定して単元デザインをすれば、だいたい1時間目はこうするんだ、2時間目はこうしてって子どもが見通しをもつし、自分も同じように進められるし、1時間で自分が想定しているところまでいなくても、次の時間に修正できるっていうか。(B)
ルーブリックの共通理解	課題は、あるかな・・・。文言はこちらが決めたことで、子どもに落ちていかないと自己満ルーブリックで終わってしまう。共通理解をしないといけないから、いつも配って終わらずに、、こういうのが good だよって。(A) 大きく逸脱するのはないけど、子ども自身がAのためにこれをしました!ってのはないかな。こっちが気付いて、それめっちゃいいよって言うと、子どもはこれがいんだって。(A)
ルーブリックの活用	最近では、示したからには、授業の半ばだったり、パフォーマンステストの前だったり、実際子どもにどこを目指すか丸つけさせたり、意識させたりして。子どもの振り返りでも very good もらえたんで。最近になってようやく。(A)

対象者は【ブレは少なくなったなって。最初にゴールを示したから、そこに向けて、内容や方法は変えつつだけど、そこに向けていくっていう。】と回答している。これは<単元終末のゴール>が授業者として明確になっている自覚があると考えられる。また、【最近では、示したからには、授業の半ばだったり、パフォーマンステストの前だったり、実際子どもにどこを目指すか丸つけさせたり、意識させたりして。子どもの振り返りでも very good もらえたんで。最近になってようやく。】からも、同様に<単元終末のゴール>をまずは授業者が意識した上で、児童と共有しながらコミュニケーションに対する指導や支援を行うことを意識していると考えられる。

【課題は、あるかな・・・。文言はこちらが決めたことで、子どもに落ちていかないと自己満ルーブリックで終わってしまう。共通理解をしないといけないから、いつも配って終わらずに、、こういうのが good だよって。】と述べている。これは、<児童と共有>することが、授業における授業者の指導改善の手がかりとなっていることを示している。児童と共有することについて、【子どもにこれをやればいんだって理解してほしいんですけど、正直なことを言うと、自分が評価するときにそこに頼れるんで。子どもに示したから、このあられだったらBだなって。】という発言から、<授業者の指導の手がかり>として、ルーブリックが機能していることが明らかとなった。先述のとおり、ルーブリックは子どもの学習状況を修正する、いわゆる学習改善のために作成されるが、教師が自信をもって評価することができる要因ともなりうる。

これらの結果からは、ルーブリックを教師と児童が共有することが学習を焦点化させるという指摘（赤沢、2022）と合致し、本研究においても教師は単元終末のゴールを意識するようになったことが語られた。

教師が自信をもって指導できることについては、【自分の指導の改善にはある程度なってるかと。】と述べているとおり、ルーブリックを作成し、その単元や活動において、何を指導・評価するのか、授業者にとって<指導の拠り所>となっていることが示唆されている。ルーブリックがあることが評価の観点や指導の方針を決定する手がかりとなっているという佐藤ら（2024）の主張と重なる。つまり、教師が自信をもって指導を行う根拠となっていると考えられる。

授業における教師の振る舞いから考察を重ねてみると、【パフォーマンス課題を設定して単元デザインをすれば、だいたい1時間目はこうするんだ、2時間目はこうしてって子どもが見通しをもつし、自分も同じように進められるし、1時間で自分が想定しているところまでいかなくても、次の時間に修正できるっていうか】という発言からは、授業者が単元のゴールを見据えた上で、ゆとりのある指導につながっていると考えられる。授業者が単元全体を見通したうえで、ゆとりのある指導をすることは、【今までは「こうじゃない?」「こういうことでしょ、こうしなよ」って言っちゃってたんですけど、今は、インド人を想定しているの?とか。I like ice cream. って書いたら、「自分のことを書かないで」って言ってたけど、今は「どんな言葉をかけてあげられそう?」って。】といった、児童の思いを尊重して、その児童が伝えたいことを引き出したり、児童とともに伝える内容を検討したりする、共同探究者としての指導が可能になるということである。

## 6. 2. パフォーマンス課題及びルーブリックの活用は、対象者自身の学習観・指導観にどのような影響があったか

コード	発話内容
見とりの多様化と深化	今は一文書いてくれれば、こういうことかなって、聞いてあげられる。周りも慣れてきているからできる。(B) 子どもがこっちの予想を超えてくるっていうか。最初名前とかわかる、これくらいかなって。でもサンドイッチの単元は、この具材入れてくるんだって。こっちが予想してないことを言うてるから、やっぱり子どもの思いを大切にしないとイケないなって。(B)
独創性や創造性	知識・技能は繰り返せば、100回言えたい子もいるし、1回で言えちゃう子もいるし。思考判断表現はその子なりの・・・目的はこっち

	で設定はしますけど、その子なりに違う気がして。(B) 一人一人違うなって、より感じるようになって。決まった文があって、一部分変えるだけだと、言ってる子は違うかもしれないけど、そんなに変わらない。(B) 変わらないところ・・・ルーブリックの中でABCの基準があって、goodは具体的に伝えているつもりで、これがいいよって。でも、very goodはすごい抽象的で、その子なりのアイデアだったりを、大切にしてほしいなって。こっちの考えを締め付けすぎないように。(A) だけど、言語活動を変えると、言う順番が変わったりとか、もちろん相手意識も違って。その子らしさがすごい出るっていうか。(B)
教師の協働	担任の時は、専科の先生とすり合わせたりして、やってましたね。ゴールどうしますか?とか。こんな形でやります、ならじぶんもそうします、みたいな。でもその時はルーブリックはなかった。(A)
教師主導	一年目はおれが頑張ってる、めっちゃしゃべってる。話のおもしろさで引っ張っていく感じで。(B)
「失敗」の変化	今のほうが失敗はするかもしれないけど、失敗にもいろいろあると思って、子どもが止まるとか。子どもが生き生きしてると、今は。前は専科っていう立場は初めてで、それまでも外国語の授業は担当してましたけど、担任として。一年目は英語嫌いになってほしくない、できるだけ簡単に。すぐできるっていう風にしたいくて。教科書どりに言えたいって。それだと自分がすぐに飽きちゃう。これ、おれじゃなくてもできちゃうじゃんって。(B) 一年目のときのほうが失敗しない自信はあった。冒険しないから。

授業者にとって、パフォーマンス課題及びルーブリックを活用した授業づくりにおける変容は、授業構想と指導や支援において大きな自信となり、児童の思いを引き出したり確認したりしながら、単元のゴールに向けて指導をすることが可能になったことが描き出された。それでは、パフォーマンス課題及びルーブリックを活用した授業づくりは、教師の学習観や指導観にどのような影響を与えるのであろうか。

特徴的な発話内容として【今は一文書いてくれれば、こういうことかなって、聞いてあげられる。周りも慣れてきているからできる。】が挙げられる。書くこ

との言語活動においては、苦手意識が強かったり、書くことに抵抗感をもったりする児童も少なくない。一文しか書けない児童には、「もう一文書こう」「簡単な英文なら書けるかな」といった表層的な指導をする傾向がある。この発言からは、外国語という母語ではない言葉を一文でも書いてコミュニケーションを図ろうとしたことへの＜肯定的な価値づけ＞を行いながら、一文に込められた児童の思いを確認しようとする意識を有していることが明らかである。そのような、児童の思いを引き出しながら、その児童の英語の記述や発話内容の意味を解釈し、認めていくことは、その児童らしい伝達内容や、その児童の使いやすい表現とともに確認し、習得を促すことが可能となる。【知識・技能は繰り返せば、100回言えればいえる子もいるし、1回で言えちゃう子もいるし。思考判断表現はその子なりの・・・目的はこっちで設定はしますが、その子なりに違う気がして。】や【一人一人違うなって、より感じるようになって。決まった文があって、一部分変えるだけだと、言ってる子は違うかもしれないけど、そんなに違わない。】という発言からは、一人一人の児童の＜発話や記述の差異＞を起点に、授業を展開し、さらに、他の児童へ学びを共有するきっかけとなり得る。

こうした学習観・指導観の変化については、この対象者も教職に就いた初期から感じていたわけではない。【担任の時は、専科の先生とすり合わせたりして、やってましたね。ゴールどうしますか？とか。こんな形でやります、ならじぶんもそうします、みたいな。でもその時はルーブリックはなかった】【一年目はおれが頑張ってる、めっちゃしゃべってる。話のおもしろさで引っ張っていく感じで。】と回答している。ルーブリックを活用する前後で、指導観が大きく揺さぶられたことが描出されたと言える。教師が授業に関する相談をしていくことの重要性とともに、現在はルーブリックやパフォーマンス課題を軸に置いた授業相談が可能となっていることを示唆している。これは、複数教員が相談することで、パフォーマンス課題やルーブリックの質的向上が期待できるという辻(2022)の研究とも重なる結果である。パフォーマンス課題及びルーブリックを作成することが、授業づくりの肝要な部分を捉え、指導や助言に生かすことになり、英語授業担当として成長につながることを示唆されている。

## 7. 結語

本稿では、パフォーマンス課題やルーブリックを授業に導入した小学校教員が、外国語教育における学びをどう捉えるようになったのか、授業における指導内容や方法に変容があったのか、いわゆる学習観と指導観に与えた影響を明らかにすることを目的とした。

研究課題「ルーブリックの活用は、授業づくりにど

のような影響があったか」については、単元のゴールを授業者が見据え、児童と共有することで、自信をもって指導することが可能となったことが描出された。授業者は、ルーブリックがあることで、単元を見通したゆとりのある指導を行うことができ、児童の英語の記述や発話に関して肯定的に見とり、価値づけることができるようになることが明らかとなった。1時間単位の授業において「教えてなくてはいけない」という意識から、単元を通して児童がゴールに向かって学習を展開することに寄り添う支援がしやすくなったことが示唆される。

研究課題「パフォーマンス課題及びルーブリックの活用は、対象者自身の学習観・指導観にどのような影響があったか」について、まずパフォーマンス課題におけるルーブリックを用いた評価は、学習過程を重視する評価方法であるという指摘と合致する結果となった。児童自身がパフォーマンスを改善しようとする過程に寄り添い、児童がどのような意図やねらいをもって発話や記述をしているのかを見取る。これは児童の学びをより具体的に理解しようとする学習観につながる。学習の成果を英語が思うように記述・発話できない児童に対しても、一文・一語の価値を共有し、その内面から思いを引き出そうとする教師の学びの解釈に対する意識変容が析出された。一人一人の児童の心情面を尊重した指導は、その児童の思いから授業展開が可能であることを意味し、子どもの側に立った指導観が徐々に身につけていると示唆される。

一方、パフォーマンス課題とルーブリックの活用について、短い期間での実践的研究においては、その解決が難しい課題も見られる。【なんか、その、パフォーマンス課題は教科書の言語活動を変えすぎると、というか、相手意識を不特定多数にしたりすると子どもが困っちゃう。アレンジしすぎると、すごい子どもが困るというか、ペンが進まない。】のように、パフォーマンス課題の設計の困難さが浮き彫りになった。加えて、教室には様々な事情があり、【ちょっと遅れてる子が、自分からどうしたらいい？って相談に来ることもあるし、一緒に自由練習しているうちにいつのまにか最低ラインをこえていたり。友達に助けてもらっていたり。Badに留まる子は学ぶ意欲がないか、何したらいいかわからないか。そういう子はどうしてもbadになってしまう。】という発言からは、外国語の授業において、援助要請を示すことが難しかったり、友達とかかわることにそもそも課題ある子どもへの効果のある指導体制が構築できていなかったりすることが挙げられる。パフォーマンス課題やルーブリックは、授業づくりの有効な手がかりとなりうるが、万能ではないことも言及しておく。

最後に本研究における課題を示す。本研究は2名の教師の事例に基づく探索的研究であり、結果の一般化

については慎重である必要がある。加えて、筆者が授業構想の支援を行ったため、研究者の関与が比較的短い期間において、教師の認識形成に影響を与えた可能性がある。これらを踏まえると、英語専科に限らない幅広い教員と対象とすることや、研究者の関与と認識形成への影響についても考察を重ねる必要がある。パフォーマンス課題やルーブリックの作成について議論を重ねながら、教師の授業改善を図る一助となることを目指し、今後の研究を深めていく。

#### 引用・参考文献

- 阿部敏子(2019)「CAN-DO リストを活用するためのルーブリックの分類と作成例」『中部地区英語教育学会誌』第48巻、pp.1-8.
- 赤沢真世(2025)「改訂版小学校外国語教科書の分析ー逆向き設計とパフォーマンス評価に焦点を当ててー」『佛教大学教育学部学会紀要』第25号、pp.1-12.
- 赤沢真世(2022)「小学校外国語科・外国語活動の授業づくり」教育出版
- 石塚歩(2024)「パフォーマンステストとルーブリックで見取る17か月のSmall Talkの実践と成果」『小学校英語教育学会誌』第24巻1号、pp.100-115.
- 泉恵美子・長沼君主・山川拓・幡井理恵(2022)「思考・判断・表現を見取る5領域の指導と評価ー話すことの教科書特徴分析と授業実践事例を中心にー」『小学校英語教育学会誌』第22巻01号)、pp.54-69.
- 稲葉英彦(2024)「外国語教育における「学習評価と授業改善」に向けた研修とその分析ールーブリックを活用した単元づくりに着目してー」『静岡大学教育実践支援センター紀要』第35号、pp.238-246.
- 駒井健吾(2025)「評価基準っ評価規準の達成度を測るための指標たりえているか」『中部地区英語教育学会紀要』第54号、pp.49-56.
- 佐藤郁哉(2008)「質的データ分析法 原理・方法・実践」新曜社
- 佐藤剛・大高智英・北向周平・小川快都・佐々木駿介・柴田真帆・中村尚平・畠山大輝・柳谷美羽(2024)「評価者が重視する観点とルーブリックの活用効果ー小学校外国語科における話すこと(やり取り)のパフォーマンステストにおける分析ー」『弘前大学教育学部紀要』第132号、pp.111-119.
- 高井一雄・岡崎浩幸(2019)「ルーブリックを活用した授業実践とパフォーマンス評価ー学習者の自信形成と教師の協働を目指してー」『富山大学人間発達科学部紀要』第14巻1号、pp.63-71.
- 丹藤永也(2023)「青森県内小学校におけるスピーキングパフォーマンス評価の実態と課題」『東北英語教育学会研究紀要』第43号、pp.84-96.
- 辻りこ(2022)「英語ライティング学習におけるルーブリック評価のあり方に関する検討：ルーブリック評価に関するシステマティックレビュー」『和洋女子大学紀要』第63集、pp.83-92.
- 西岡加名恵・石井英真(2018)「見方・考え方を育てるパフォーマンス評価」明治図書
- 松村昌紀(2017)「タスク・ベースの英語指ーTBLTの理解と実践」大修館
- 文部科学省(2022)「英語教育実施状況調査」  
[https://www.mext.go.jp/content/20220513-mxt\\_kyoiku01-000022559\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20220513-mxt_kyoiku01-000022559_2.pdf)